

# 童話が生まれた場所「未明の部屋」について

渡 辺 真 守

## 一、未明の部屋の公開

平成二十七年（二〇一五）十月、当館の一室を改装し、未明の部屋が一般公開されました。これは未明が晩年を過ごした東京都杉並区高円寺の家の書斎を再現したものです。

平成二十六年（二〇一四）、高円寺の家は老朽化を理由に取り壊されま



再現した未明の部屋



昭和32年5月2日、高円寺・自宅書斎にて  
撮影・富樫 啓

した。その際、遺族の方々により大切に保管されていた生前の品々は、当館に寄託されました。こうした貴重な品々を多くの人々からご覧いただくため、また、文学館開館十周年記念の一環として、文学館内に新たに再現をすることとなりました。

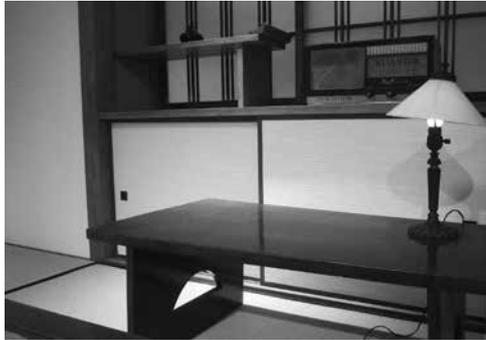
未明童話が生み出されたこの部屋は、床の間も備えた八畳一間の一室であり、壺などを置くための飾り棚を設けた出窓を配し、周囲の造付書棚には多数の書籍が所狭しと収納されています。また、部屋の中央にはテーブル、脇息、座布団、火鉢が置かれ、窓際には文机と電気スタンドを配置、出窓にはラジオ、床の間には未明直筆の書を飾りました。これら展示品はいずれも未明が生前使用していたものであり、一旦は姿を消してしまつた書斎が文学館の中に新たに甦りました。

再現に当たっては、当時の写真や遺族の方々からの聞き取り等を参考に、塗装や加工によって生前の書斎の雰囲気や佇まいが感じられるように処理しています。柱や襖の色、壁紙の質感、欄間の建材を細く加工するなど、細かい点も忠実に再現しています。出窓に設置されたガラス戸は唯一残つた高円寺の家の建具であり、昭和期の建物の雰囲気をより一層際立たせております。

この他、未明の部屋の展示場では三台の展示ケースを新たに配置し、未明の自筆原稿や昭和期に発表された童話を展示しています。このうちの一台には万年筆や鉛筆、消しゴム、鉛筆削り、ハンチング帽、眼鏡、懐中時

計などの愛用の品々を展示しています。未明の部屋と合わせて観覧いただくことにより、未明の執筆当時の状況や雰囲気味わうことができます。はないかと考えています。

ガラス戸、飾り棚、ラジオ  
ガラス戸は高円寺の家の唯一残った建具



文机とスタンド



座布団と脇息

自然や路傍の石ころにも、魂や精神性を感じる未明の居宅らしく、広い縁側に面した庭には、石の灯籠、水鉢、岩や自然石を配し、中央には小さな池が二つ。豊かな緑の繁る、落ち着いた佇まいが、来客者の目を愉ませ



模範大東京地図 昭和28年度版  
昭和28年(1953)4月 日本地図

## 二、晩年の未明

未明は昭和五年(一九三〇)、四十八歳の時高円寺に移り住みます。それまでは神楽坂や雑司ヶ谷など、にぎやかな下町で借家暮らしをしてきましたが、ようやく自分の家を持ちました。

それから二十年あまりのち、二度の空襲にも焼け残った家で穏やかに暮らしていた未明でしたが、昭和二十七年(一九五二)七十歳の時、隣人が子どもたちに童謡を教えるようになり、ピアノの音と大きな歌声が、すぐそばの書斎で原稿を書く未明を悩ませました。そして、とうとう引越しを決意。今回再現した「晩年の家」に移ったのでした。



昭和31年「晩年の家」の玄関に立つ未明

る、そんな家でした。

書齋では北向きの窓辺に趣味の骨董を、縁側には盆栽や蘭の鉢を置いて、七十九歳でこの部屋で息を引き取るまで執筆活動を続けました。

書齋での仕事ぶりについては、午前中はこの書齋で執筆して、午後になると編集者や若い作家、友人が訪ねて来て接客をしたり、近隣の蕎麦屋やラーメン屋、時には新宿の店まで飲みに行ったりすることもあったそうです。特に同郷の作家・小田嶽夫とは親しく、近くの中華料理店で、チャーシューとビールで晩酌を楽しんでいたようです。

趣味だったマツチ箱のコレクションでも、高円寺駅、中野駅など近所の店はもちろん新宿、銀座の喫茶店のものも多くあったことからいろいろな店に行っていたことがわかります。

散歩好きの未明でしたが、晩年の家であるこの住まいに移ってからは散歩に出ることを億劫に思うようになりました。「長い間机の前に坐って仕事をしてきたから、運動不足でしげんに足が弱くなったのだろう」と、未明は時折思い立ったように、杖をつきながら庭を歩き、足を鍛えようとしていたようです。

### 三、未明のメッセージ

そのような未明のもとに一人の来訪者が現れます。中郷村（現上越市中郷区）の村長松井泉吉氏です。児童のためにささげる未明の情熱を村内の青少年教育振興のシンボルにしようと、未明の詩碑を建てたい旨を伝えに来たのでした。未明は断りましたが、松井村長は何度も訪れて説得を続け、ついに詩碑建設の約束を得ることができました。

昭和二十八年（一九五三）夏、詩碑が建設され、十一月二十三日にこの詩碑の除幕式が執り行われることになりました。未明は現地向かおうとしましたが、足腰が弱っていることを理由に断念。松井氏の懇請に応じて、テープレコーダーにあいさつの言葉を吹き込み、除幕式で流すこととしました。内容は次のとおりです。

今度松井村長さんおよび、皆様のお力によりまして、私の詩碑が夕日ヶ丘に建てられました。私はたいへんにこれを嬉しく思っています。それで今度、除幕式があるようですが、何分、私は歳をとってまして、寒い越後に帰ることが骨が折れますので、帰ることができません。それを非常に私は残念に思っています。

私は子どもの時分、故郷から東京へ来る間、光が原の裏の園を通って、行き来しまして、あの秀麗な妙高山を眺め、また故郷の春日山に帰って、日本海を眺め、幾日かを過ごした記憶が頭にありありと残っています。私は、子どもの時分から妙高山が非常に好きでありまして、あの実に美しい姿の秀麗な、朝晩私の眺めるたびに崇高な感じをつかったものであります。

そしてまた私は故郷の春日山に帰りまして、あの松風の恐ろしい渺茫たる日本海の姿を眺めて、空想に耽り、昔の謙信の姿に憧憬したものです。謙信は、あなたがたご存知のとおり、実に立派な日本精神の持ち主

でありまして、戦争をする敵に塩を送ったということは有名な話であります。また私は日本海を眺めて私の『赤い蠟燭と人魚』という作品を作ったのであります。

みなさんどうぞ日本の子どもとして、この次の日本を担っていかねばならない方たちです。どうか日本精神というものを忘れず、日本の子どもであるという誇りを忘れることなく、しっかりと勉強をやってください。

メッセージには、十九歳で上京し、半世紀以上にもわたって東京で生活をしてきた未明の遠き故郷を懐かしむ心と、次世代を担う子どもたちへの励ましの想いが込められています。

この録音テープは現在当館で大切に保管されており、その肉声は展示場で聞くことができます。このメッセージは未明の書斎で録音されたものではないかと推測されます。この肉声を聞きながら未明の部屋をご覧いただくと、どのような思いを込めて執筆をしていたのか、未明作品をなお一層身近なものと感じることができるのではないのでしょうか。

#### 四、展望

未明の部屋では、定期的に展示品の入れ替えを行い、未明の愛用品や高円寺時代に書き残した童話作品などを紹介していく予定です。また、未明童話読書コーナーも臨時的に設け、未明の部屋を傍らに感じながら、童話作品を読むことができるスペースも用意しております。そして、未明の部屋での童話読み聞かせを実施する企画も現在検討中です。

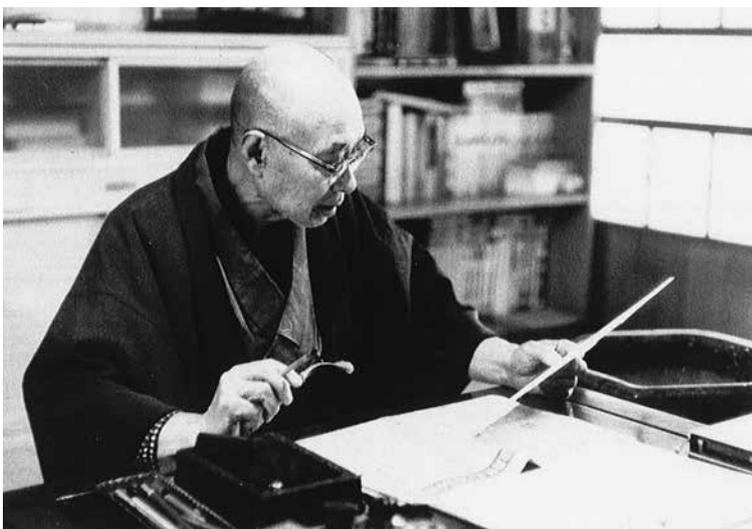
開館十周年を迎え、小川未明文学館の魅力をますます向上させるべく、この未明の部屋を文学館の新しいシンボルとして、今後も広く一般の方々に公開していくとともに、来場者の皆様に楽しんでいただける企画に取り組んでいく予定であります。

#### 参考文献

- 岡上鈴江 『父 小川未明』（新評論 一九七〇年）  
岡上鈴江 『父未明とわたし』（樹心社 一九八二年）  
新潮日本文学アルバム六十 『小川未明』（新潮社 一九九六年）  
『小川未明文学館館報 第九号』（小川未明文学館 二〇一五年）

#### 協力

小川英晴氏



昭和32年高円寺・自宅書斎にて 撮影・富樫 啓